過去のスポーツから現代のスポーツを知り未来のスポーツに貢献する

専門分野　スポーツ史

担当科目　スポーツ史特論など

イギリス・スポーツ史、フットボール史、大阪スポーツ史など、スポーツ史を広く研究しています。「人間はどうしてスポーツをするのか」と考えるうちに、この分野を研究するようになりました。現在関心をもっているテーマは、ドーピング問題などを引き起こす現代スポーツの勝利至上主義的な気風についてです。これは、スポーツを取り巻く社会的・時代的背景によって成立しているものであり、スポーツ界の内側だけ見ていては解決できない課題です。研究を通して、スポーツの未来に何らかの貢献をできればと思っています。

授業で最近扱っているのは、東京オリンピックが開催された1964年当時の新聞記事や雑誌記事です。当時の大会の様子を調べながら、現代の大会を客観的に見る視点を養っています。現代のスポーツを相対化して理解しようとするとき、過去のスポーツは格好の比較対象になります。スポーツ史の研究は、現代スポーツが抱える課題を発見し、解決するための手がかりになるでしょう。また、昨今はスポーツ団体やアスリートが社会に対して影響力をもち、社会貢献が求められる傾向が増えてきています。今後のスポーツ界を牽引する皆さんには、人文科学系の学問に触れながら、そのような活動に必要な教養を身につけていただきたいと思います。

キーワード

■史料

歴史研究は文献を読むことが基本。授業では、生の史料にふれる機会を重視している。

■情報収集

必要な情報を得るためには根気が必要。あきらめずにさまざまな文献を集めて読むこと。

■フットワーク

研究を深めるためには、学内外の人に話を聞きに行き、国内外から文献を集めるフットワークの軽さも重要。

■ひらめき

新しい課題を発見するひらめきの力も重要。アンテナを広く張り、いろいろなことに興味をもつ姿勢を。

中房 敏朗 教授

略歴

奈良教育大学大学院修了。中学校常勤講師などを経て仙台大学に勤務。仙台大学では空手道部監督、東北空手道連盟副理事長・事務局長を務めた。現在はスポーツ史学会理事を務める。

著書・研究論文

『スポーツの世界史』（編著・一色出版・2018年）
『なにわのスポーツ物語』（編著・丸善プラネット・2015年）
『スポーツ学の射程：「身体」のリアリティへ』（共著・黎明書房・2015年）
「中世イギリスにおけるボール・ゲームを表す語句及び資料の存在状況について」『スポーツ史研究』31（単著・2018年）